



TITLE:

まえがき

AUTHOR(S):

CITATION:

まえがき. 1889年十津川崩壊災害の防災科学的総合研究 2005: 共同研究
(一般) 15G-06.

ISSUE DATE:

2005-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/148000>

RIGHT:

まえがき

紀伊半島中央部は西南日本外帯の堆積岩類，とりわけ四万十累帯をはじめ三波川帯，秩父累帯，中新世火成岩類などによって占められ，これらで構成される山体は十津川・北山川を含む熊野川水系，有田川水系，日高川水系，宮川水系などの河谷によって深く開析されている．このような地質地形条件を有する同地域は，1889年の十津川災害，1953年の有田川災害のように，豪雨が誘因となり大規模な崩壊と，それに伴って形成された天然ダムの決壊によって大きな災害を蒙ってきた．さらに，この地域は，1944年と1946年にそれぞれ東南海地震と南海地震の影響を受けている．

とくに，十津川災害については，後述するように，災害の状況が「吉野郡水災誌（全11巻）」に詳しく記録されており，また同水災誌をもとに現地調査を通した歴史的な大規模斜面崩壊の復元，発生要因などについての研究も従来なされている．われわれは，1982年から10年間にわたり，1889年（明治22年）に起きた十津川災害の共同研究を行った．それ以降に蓄積された十津川災害・有田川災害に関するデータを整理すること，十津川流域および周辺流域の地質に関する見直しと最近までの知見を整理すること，大規模崩壊地を現地で再確認すること，南海・東南海地震による詳細な被害状況および地盤変位，最近発生した斜面崩壊の特性ならびに十津川流域の堆砂と流砂の状況などを把握することは，今後想定される十津川流域および隣接流域地域の豪雨・地震災害への対応を総合的に評価する上で重要な課題であると考えた．

そこで，十津川災害を西南日本外帯の堆積岩地域における斜面崩壊の基本事例として位置づけ，地質条件をふまえつつ，来るべき東南海地震にも対応した当該地域における崩壊斜面の抽出と危険度評価など，防災上の重要課題を明らかにすることを目的とした．なお，本研究は，誘因が豪雨の場合とともに，南海地震，東海地震の影響を考慮に入れて，山体に発生する大規模崩壊の発生危険度評価について総合的に検討しようとしたものである．その成果は地域防災を検討する際の基礎資料として位置づけられるものと考えられる．

研究組織

研究代表者： 石井孝行 大阪教育大学教育学部 元教授

研究分担者： 平野昌繁 大阪市立大学文学部 名誉教授
藤田 崇 断層研究資料センター 理事
波田重熙 神戸女子大学文学部 教授
諏訪 浩 京都大学防災研究所 助教授